

れ等の線に沿つて発展した大東京の市街もこの辺までくるとその連続性を失い、駅附近にその市街地が限られるようになり、まだ多分にひなびた景観を呈し武蔵野の古い面影を至る所に残している。しかしこの地域も最近大東京の発展と共に急速に発達し、都心と密接なつながりを持ちながら、その衛星都市的役割にも徐々に変化を来しているようである。

一般に、武蔵野は大正十二年の関東大震災を一つの契機として急激な変貌を遂げたといわれており、当地域も都会への流出を主とした野菜栽培地から都人の住宅地と化し、更に第二次世界大戦を一つの契機として、戦災による都市の外延への人口移動は著しくなり、市街地への転化、工場地帯の発展などがみられ、更に最近の東京の都心への人口集中がその近傍の諸地域にも及び、ごくごく新しい市が誕生することとなり、小金井、府中の両市も御多聞にもれず各々昭和三十三年、昭和二十九年に市制が施行され、大東京の後背地として重要な役割を演ずる、いわゆる衛星都市としての機能を全うすることとなったのである。

以上の如き衛星都市化の問題、或は集落の発展を主眼とした考察は、当研究地域の過去の史的発達過程を知ると共に、将来の方向を示すものとして一応本地域の地理学的な基本的特質を把握したものと想うのである。

## 曾根丘陵地域の地形と土地利用

濱田文子

山梨県甲府市の南方約10 Km、御坂断層崖の前面に発達する曾根丘陵は巾3 Km、長さ10 Kmの地域であり、甲府盆地床と背後の御坂山地との間の中間的な位置を占めている。丘陵の構造物質については、古扇状地堆積物説、氷河堆積物説等のとられた時期もあつたが現在では火山泥流説が有力となつていゝる。即ち、甲府盆地北方の火山——ハツ岳、茅ヶ岳等——を源とする火山泥流層（輝石安山岩礫が凝り、砂、火山灰によつて凝結され凝灰岩状になつたもの）が30～50 m程度の発達をみせており、これが曾根丘陵の主体をなしているのである。尚、火山泥流層の上部には浮石とロームの堆積が見られるが、土壌侵蝕が激しい為、これらが全面に残存しているとはいへない。又、火山泥流層の下部には古甲府湖の湖成堆積物層の発達がみられる。

丘陵部は開折が激しく、御坂山地に源をもち前面を流れる笛吹川に流れこむ小河川によつて6小丘陵に分けられる。これらの小丘陵は何れもその前面を約60 m前後の崖をもつて盆地床に接しており、又その表面は大略山地に

向つての逆傾斜の傾向を示している。即ち、本地域は背後の御坂断層と大体平行する断層による傾動地塊的な地域と考えられるのである。

尚、本地域においては、この御坂断層及び丘陵前面の断層によつて、御坂山地、曾根丘陵、甲府盆地床とブロック化されるのに加えて、小規模ではあるが、丘陵内にも断層が散在するものと考えられる。但し、傾動運動と丘陵内断層運動との関係、又両者の現地形への結びつきの程度等については不明瞭である。例えば、曾根丘陵の中でも西部に逆傾斜が激しく、又曲折の度合も激しいという事実とこの両運動がどの程度の結びつきを示すものかは判り難い。

笛吹川支流の小河川は各々小丘陵間に谷、平野を形成するが、一般に谷の部分に発達がよく、谷出口にてせばまる形を示している。又笛吹川自体が丘陵前面では天井川となつているが、小河川の方も谷出口近辺から天井川の様相を示すようになっていく。

甲府盆地はその地形的制約により内陸性の気候特色を備えているが、曾根丘陵上の気候も大体甲府盆地床に準ずるものをもっている。但し、盆地床部分に比べるとやや冷涼、又はるかに多雨となつている。

以上の様な本地域の自然環境のもとに人間生活は、この地に石器文化、古墳文化の遺跡の残存する事からみてかなり古いものと考えられる。現在、丘陵上は大体耕地化されており、又この地の人口の90%近くが農業人口である事からみて、本地域を純農業地域と考えて間違いない。又地形との関係で見ると大体丘陵部を中心とする畑地域と、盆地床及び小丘陵間谷底平野を中心とする水田地域とに分けられる。

尚、この地の農業については下記の11点に要訣できる。

1. 本地域は純農業地域であり、今後も農業地域として進むであろう。但し、甲府市その他の地への労力供給地としての傾向は強まるかもしれない。
2. 農家ノ戸当りの平均耕地面積の小さい山梨県にあつては、本地域のノ戸当り平均耕地面積は大きい。
3. 本地域は商岳農業の地域であり、兼業率は低い。又ノ戸当りの農業物販売金額は一般に高い。
4. 丘陵上は殆ど畑地化されているが、その土壌侵蝕の激しい事はこの地の農業を不利にしており、積極的対策が望まれている。
5. 農業内容からいうと養蚕地域であるが、桑園面積がこれ以上増える事はあまりなく、むしろ減少の途をたどるのであろう。その場合には大体果樹園が桑園にとって代るものと思われる。

6. 水稲は自給用のものが多く、両岳作物としての重要性は比較的薄い。又  
 溼田の多い事が裏作を不振にしている。今後コンクリート渠その他排水の  
 設備をよくすることが必要である。
7. 普通畑も自給用の性格が強く、溼在畑、混合畑となつている。今後、普  
 通畑を集田化することが望まれる。
8. 家畜はかなり入つているが、地域内で飼料をまかなえるようにしなくて  
 はならない。
9. 果樹は現在の所少ないが、本地域においては一番将来性のあるものといえ  
 る。但し、導入する場合には果樹園の集田化、品種の統一等が望まれる。  
 又市場との関係では道路網その他交通条件をよりよくしなければならず、  
 又早い時期に共同出荷所を設置することが必要である。
10. 本地域の養蚕は県下オ一の妥当収穫量を上げているが尚、稚蚕の共同飼  
 育及び糸桑育の普及等につとめるべであらう。
11. 尚、一部において本地域を蔬菜地域、或は花卉栽培地域としようとする  
 事も考えられているが、盆地殊より寒いその気候条件、又市場との関係か  
 らみてこれはあまり望めない所であらう。

— 上 —

## プエルトリコの地誌

林 道 子

### 目 次

序	研究の目的と方法
第一章	プエルトリコの自然
第二章	プエルトリコの歴史的背景
第一章	イスペインヤの支配
第二章	アメリカの支配
第三章	今日のプエルトリコ
第四章	プエルトリコの経済
第一章	経済的特徴
第二章	プエルトリコの農業
第三章	砂糖の生産構造
第四章	製造所
第五章	水力資源の開発
第六章	米国に対するプエルトリコの経済的結びつき